

国立大学入学と割り当て制

篠崎香織（東京大学大学院／マラヤ大学留学中）

2001年5月のマレーシアは、国立大学入学時の「割り当て制（Sistem Kuota／固打制）」をめぐる議論に終始した。MCA、DAP、Gerakanや華人諸団体、UMNO、マレー人教育関係者など諸方面の見解や意見（PASはほとんど発言せず）が、連日紙面を賑わした。

割り当て制とは、競争が生じる所に民族ごとの割り当て率を定め、ブミプトラ（マレー人及びその他の先住民族）に一定の機会を保証し、彼らの社会的・経済的発展を促すというものだ。独立時の憲法は、国王が一定の割り当て率をマレー人に確保しようと定めていたが、様々な分野で数値が設定され、それが実施され始めたのは1971年以降である。

国立大学入学時の割り当て率は、一時はブミプトラが7割を占めたが、1979年以降はブミプトラ55対非ブミプトラ45（華人35、インド人10）に設定された。だがその比率が守られていないとの指摘もある。1991年の国家経済諮詢理事会（NECC）及び2001年の第2国家経済諮詢理事会（Mapen2）の報告を元にDAPが国会に提出した数字によると、80年以降、国立大学の学士課程に入学したブミプトラの割合は全体の62～69%に及ぶ。

ブミプトラの成績が非ブミプトラに劣るとするのはマレーシア人一般の認識である。割り当て制がなければ、マレー人の大学入学者の割合は20%前後だとするマレー人の見解もある。国立大学合格者の民族ごとの最低点数は非公表のため直接のデータはないが、以

下の数字はその根拠となろう。1998年にマレーシア教育修了証（Sijil Pelajaran Malaysia、SPM、中等学校修了時に受験）の高等数学における「特優」取得者は、ブミプトラが全体の6.7%であったのに対し、非ブミプトラは全体の36.4%であり、「優等」取得者はブミプトラが37.6%、非ブミプトラが75.9%であった。また、2000年の大学卒業生における第一級学位取得者の割合はブミプトラ0.1%、非ブミプトラ8.1%で、第二級学位取得者はブミプトラ30%、非ブミプトラは60%であった。

非ブミプトラ受験生は、優秀な成績を取っても割り当て制ゆえに国立大学に入学できないこともある。ダメなら私立大学へ行けばいい、そのために政府は私立大学を奨励してきた、と教育大臣は言うが、その経済的余裕がない非ブミプトラも当然存在する。非ブミプトラはこうした不公平さに不満を抱いている。

4月末、SPMで非常に優秀な成績を収めた華人学生500人が国立大学に不合格となった。これをきっかけに割り当て制の不公平さ及び不透明さに対する批判が噴出し、冒頭のような事態に発展した。国立大学に入るにはマレーシア高等教育修了証（Sijil Pelajaran Tinggi Malaysia、SPTM、大学予備科修了時に受験）が必要だが、一部の学科（4大学81学科）はSPMだけで入学申請が可能だ。しかしその定員数は非常に少なく、SPTM取得者の入学枠約3万8000人に対し、SPM取得者のそれは約5000人である。人気の学科に

申請が集中し、競争が熾烈化し、多数の成績優秀者が不合格となった。

教育省は敏速に対応し、定員を増やし、ほぼ希望通りの学科にこれらの学生を入学させた。また、MCA 青年部や Gerakan など諸政党も華人学生からの訴えを受け付け、教育省に彼らの入学許可を掛け合った。5月2日の閣議では、成績優秀者は民族に関わらず広く受け入れられるべきだとの決定がなされた。

第二に問題となったのは、ブミプトラ申請者の成績が一定水準に達さず、合格者が減少し、それに比例して非ブミプトラの合格者数も減少したとの教育大臣の発表であった。DAP や MCA、Gerakan は、ブミプトラ枠が埋まらなかった場合、非ブミプトラにそれが割り当てられるべきだと主張し、UMNO や PAS もこれを支持した。マハティール首相は、ブミプトラが機会を享受しないならその機会を必要としている人々に明け渡すべきだと述べた。マレー人の反応は、割り当て制に甘える心理がブミプトラ学生の成績不振につながるため、これを見直すべきとの声がある一方、ブミプトラ枠が埋まらなかったのは貧困や地方の設備の不全・不足が原因であるため、この問題を先に解決すべきだとし、ブミプトラ枠の開放に消極的な声もあった。

ところが事態は思わぬ方向で収束した。教育大臣は、公表した数字が誤って解釈され、ブミプトラ枠が埋まらないかのような理解が生じたが、実際には埋まっており問題は解決済み、との声明を出した。大臣は誤った解釈をしたと一部の新聞を責めたが、大臣が合格者の減少を発表したことは他紙も伝えていた。

さらに教育大臣は、ブミプトラの割り当て

率をその人口比率に比例させ、66%まで引き上げても問題ないとか、私立大学にも割り当て制を適用する考えがあるとの発言を行った。これに対して華人諸政党や諸団体から反対の声が相次いだ。マハティール首相は、割り当て率は人口数に比例して決定されるものではないと述べ、私立大学の割り当て制に関しては、閣議でそれを行わないことを決定した。

国立大学に入学できなかった優秀な華人学生を、ここ数年シンガポールの国立大学が積極的に受け入れている。UMNO 指導者は、割り当て制が頭脳流出という弊害を招くことを懸念している。競争原理を導入し、様々な分野で効率を上げ、2020年先進国入りの目標も果たしたい。そこで彼らは常日頃マレー人が「できないのではなくてやらない」ことを叱っている。マレー人の中には、努力する必要性を説く声もある一方、「できない」理由を自分以外の周囲の状況に求める声も強い。

華人にとって割り当て制の廃止は望ましいが、それが民族間の対立を招きうること、また UMNO 指導者とマレー人社会との状況に鑑み、現状ではそれは不可能であると認識している。そこで現在は、割り当て制を運用する際の透明度や柔軟性の向上を要求することが主流となっている。しかし今回の件で華人は行政の対応、特に教育大臣のそれに対する不信感を増大させたようだ。5月2日の閣議決定も評価はしているが、それが実施される可能性は低いと見ている。マレー人のジレンマ、不透明な行政の対応、割り当て制の運用改善という華人の戦略の3つは当分同じ様相を見せ、大学入学者数が発表される時期に今年のような騒ぎが繰り返されることだろう。